

## (2) 飛鳥・奈良～平安時代

### 飛鳥・奈良時代

645年の大化の改新を契機として律令国家が成立する。全国に国・郡・里(郷)がしかれ、国・郡には役所を置き中央の貴族が国司として派遣されて中央集権体制がとられた。いわき地方の北半分には磐城郡、南半分には菊多郡がおかれ、平下大越の根岸遺跡と勿来町の郡遺跡がそれぞれの役所跡と考えられる。



西上空から見た根岸官衙遺跡群

653(白雉4年)	多珂国(たがのくに：日上市から双葉郡大熊町の北半分を分けて石城評(こおり)[※1]の設置—『常陸風土記』
718(養老2年)	陸奥国5郡、常陸国1郡[※2]を併せ、石城国を設置。—『続日本紀』

※1 評(こおり)は、郡と同義の古語

※2 陸奥国5郡：石城、標葉(双葉郡北部)、行方(相馬郡南部)、宇田(相馬郡北部)、旦理(宮城県南部)  
常陸国1郡：菊多(いわき市南部)

### 【8世紀頃の遺跡】

磐城郡＝根岸官衙遺跡群(根岸遺跡、夏井廃寺跡)

菊多郡＝郡遺跡(勿来町窪田の台地東端)

### 平安時代

奈良時代の律令制度が崩壊、開発領主(地方豪族)の台頭とともに郡郷制は再編成される。10世紀始め、菊多、磐城の二郡であったいわき地方は、12世紀までには菊田荘・好嶋荘・岩崎郡・岩城郡・楢葉郡となる。

磐城郡は、古代において国造系磐城臣氏が開発支配してきたところであり、特に9世紀前半の郡司磐城臣雄公の治世が特筆される。「続日本後紀」(840年)には、雄公は橋をかけて交通の便を図り、堰を設けて勸農策を推進し、さらに郡衙の官舎や正倉など190を改修したとの記事がある。

磐城郡は、11世紀の終わり頃常陸から侵入した大掾系平氏(岩城氏)と政権を交替し、好嶋荘・岩崎郡・岩城郡・楢葉郡に分割された。国魂文書の「岩城国魂系図」によれば、初代忠衡の肩書には高久三郎とあり、岩城氏の最初の土着地は平高久と推定されている。

### 白水阿弥陀堂

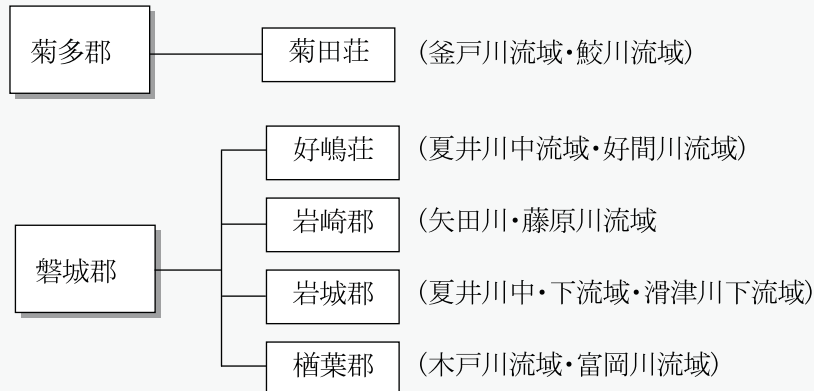
平安時代の末期には、末法思想が流行。来るべき暗黒の世の光明を求めて、無量光仏と称された阿弥陀如来信仰が盛んになった。

白水阿弥陀堂も、このような時代背景のもと、浄土式庭園をもつものとして造営された。



白水阿弥陀堂

### 12世紀末～14世紀の状況



### (3) 鎌倉・南北朝～室町・戦国時代

#### 鎌倉・南北朝時代

中世時代、いわきなどの浜通り地方は、福島県中通りの山(仙)道に対比され、東海道または海道と呼称された。鎌倉時代のいわき地域は鮫川流域に菊田荘、藤原川流域に岩崎郡、夏井川流域に岩城郡と好嶋荘があった。

文治5年(1189)の奥州合戦の結果、鎌倉幕府は、平泉の藤原氏に代わり奥羽両国の郡・郷・荘を掌握し、源頼朝に呼応し手柄を立てた岩城太郎清隆は、好嶋荘の地頭に任ぜられた。

源氏は石清水八幡宮(京都府)を厚く信仰し、東海道の要衝赤目崎(平旧城跡から八幡小路にかけて東西に伸びる台地一帯)に八幡宮を造営、幕府の1拠点とした。当時、赤目崎一帯が飯野郷といわれていたことから、この神社は後に「飯野八幡宮」と呼ばれようになった。好嶋荘は名目上は石清水八幡宮領とされたが、実質は鎌倉将軍家を領主とする荘園であり、将軍家は、好嶋荘における地頭岩城氏支配権を認めつつ、荘園領主としての年貢を獲得した。



飯野八幡宮

後醍醐天皇は、鎌倉幕府における北条氏一門の専制支配に反感を持つ有力御家人や悪党と呼ばれた新興武士などを動員して鎌倉幕府を倒したが(1333)、その後は、およそ60年間に渡る南北朝の動乱が続いた。海道諸郡(現在のいわき地方)では、在地領主が近隣の村々への侵攻を繰り返しながら地縁的結合を深め、上遠野、小河、岩城、白土、好間、岩崎、窪田等の諸氏が成長していった。

#### 中世を知る史料

飯野八幡宮神主の飯野家に伝えられてきた「飯野家文書」(国指定重要文化財)、同じく大国魂神社神主の山名家の「国魂文書」(県指定重要文化財)。

室町・戦国時代—岩城氏の勢力拡大—

海道諸郡の国人領主（南北朝時代に勢力を伸ばした在地領主）達は、足利持氏が將軍義教に反抗を企てて討伐された**永享の乱**（1438）、持氏の遺子を奉じて結城氏朝が挙兵した**結城合戦**（1440）など、室町幕府や関東・奥羽を支配する鎌倉府等の対立抗争の中で地域の支配権を伸ばした。とりわけ**岩城下総守隆忠**は、海道諸郡の国人領主・土豪・地侍層をもまきこんだ、**岩城左馬助一族の内紛**（1442）に介入、收拾を図るなかで岩城郡の惣領としての地位を確立し、やがて戦国大名として成長していく地盤を築いていった。

主な出来事

1392(明德3年)	<b>南北朝の合一</b>
1438(永享10年)	<b>永享の乱</b> 。岩城氏など海道五郡の国人領主は室町幕府に味方。
1440(永享12年)	<b>結城合戦</b> 。岩城氏は足利義教(將軍)に味方し、軍忠を立てる。
1442(嘉吉2年)	<b>岩城左馬助一族の内紛</b> 。岩城隆忠は、三坂・飯野・大館・小河・中山・白土・好嶋・上遠野・瀧・窪田の諸氏を味方につけ、左馬助を自害させ内紛を収める

戦国時代は、諸大名が軍団を率いて隣境に侵攻し戦闘を繰り返した時代である。岩城氏は、下総守親忠（隆忠の子）、下総守常隆、左京大夫重隆、左京大夫親隆、左京大夫常隆と代を重ねる中で、侵攻、同盟、婚姻政策などの知略を尽くし乱世を生き抜くが、豊臣秀吉らの台頭による天下統一の流れの中で、次第に戦国武将としての勢いを失う。

主な出来事

1483(文明15年)	海道四郡(菊田・岩崎・岩城・檜葉)の領主となった岩城下総守親隆は、本拠を従来の白土城(平北白土・南白土)から飯野平城(好間町下好間・内郷御台境町・平の高台に係る一帯)に移す。
1534(天文3年)	<b>木戸川合戦</b> 。相馬氏が岩城成隆の弟重隆の娘・久保姫を伊達植宗の子息晴宗の嫁に仲介したにもかかわらず、成隆が約束に反し白川氏との縁談を進めたことから、岩城成隆と相馬頼胤が木戸川・金剛川付近(相馬郡檜葉町)でぶつかり合った合戦。両者の講和の結果、生まれた男子を岩城家の嗣子とする条件で伊達氏と岩城氏の婚姻が整った。
1545(天文14年)	<b>天文の乱への参戦</b> 。天文の乱は、伊達植宗と晴宗の父子対立に端を発する諸大名の抗争。晴宗の男子誕生後、岩城家の嗣子として差し出す旨の約束が果たされていなかった等の事情から、岩城重隆は当初中立の態度を示した。その後、晴宗の長子鶴千代の岩城家入嗣が決まったため、天文14年、重隆は伊達家側として参戦し、乱の終結に大きな役割を果たす。天文17年に將軍足利義晴の勸告で和睦が成立し、植宗が引退、晴宗が伊達家当主となった。
1573(天正1年)	<b>室町幕府の滅亡</b>
1590(天正18年)	<b>奥羽仕置</b> 。豊臣秀吉が小田原の北条氏を滅ぼした後、会津に入り、奥羽の検地と刀狩を断行、奥羽地方に対する支配権を確立した。この渦中であって、岩城常隆が24歳で病死、岩城氏と伊達政宗の接近を警戒した秀吉側近らの画策により、岩城家は佐竹義重3男の <b>能化丸</b> <small>のうげまる</small> を嗣子に迎え、所領安堵を得た。

### 【室町・戦国時代の産物、文化】

#### ○産物

米・粟・大麦（天文17年（1548）「小野氏山役日記」）・養蚕・製紙・鹿革・帖絹・塩・海栗醬（うにひしお）・鯉・鮎・蛸等。また、漁や他国領攻めするとき軍船となる船は217艘（文禄4年（1595）「岩城領小物成目録」）。

#### ○文化

1393（明徳4年）：恵日寺の中興開山  
1445（文安2年）：薬王寺再建  
1501（文亀年間）頃：専称寺、浄土宗名越派本山として初めて勅願寺となる。

### 久保姫と岩城親隆

戦国時代、いわき地方を支配した岩城重隆の娘、久保姫は伊達晴宗と結婚したが、これに当たっては、久保姫と晴宗との間に生まれた長男は岩城重隆の養子となり、岩城家の家督を継ぐとの約束が交わされていた。

約束どおり久保姫の子、鶴千代丸（後に親隆と名乗る）が、いわきにやってくると、祖父、重隆は大喜び、飯野八幡宮に自分の名と鶴千代の名を刻んだ大梵鐘を奉納した。

鶴千代丸は武人として素晴らしい才能を発揮し、岩城家に繁栄をもたらすが、ある時、戦場で敵の残党に襲われ、九死に一生を得て、いわきに戻った。しかし、その後、どうも様子がおかしい。「不例」（病気）の身となってしまったのだ。

鶴千代丸（親隆）以後、岩城家は常隆、貞隆と続くが、小田原参陣、関が原の戦いと続く歴史の大きな奔流のなかで、その勢いを徐々に失っていった。



マンガ「いわきの歴史から」  
“久保姫の時代”より  
（編集・発行：いわき市）